

## 子どもたちがルールづくりに関わる体育科授業

坂田 行平

### 1 はじめに

本校では、子どもたちが主体的に学習に向き合い続ける態度として、「社会事象や教育実践の中で子ども自身が主体となって学びを深めていく過程において、ゴール（終点・完了）だけを目指すのではなく、あらゆる実践が達成したあとにおいても、よりよい自分・よりよいものを目指して考え続ける・向き合い続ける態度」を大切にしている。この姿は、これまでに子どもたちが学んだものや自分自身の経験をリソースとして活用し、統合的に思考を働かせることである。

体育においては、現在の運動文化のあり方を発展的に継承しつつ、よりよい運動文化に変革しようとする態度であると考ええる。自ら進んで運動に取り組み、運動を楽しもうとする子どもの姿をめざしたいと考える。

丸山（2015）は、体育における実践的課題を3つの領域に整理し、これらを「複合的に統一された不可分な関係」としてとらえ、図1のように示した。体育は、主に技術的内容を中心とする「ともにうまくなる」過程と、組織的内容を中心とする「ともに楽しみ競い合う」過程で構成されるが、学習段階が進むにつれて「ともに意味を問い直す」過程として、社会的・歴史的・文化的認識などの社会的内容の獲得が目指される。これについて、丸山（2015）は次のように説明している。

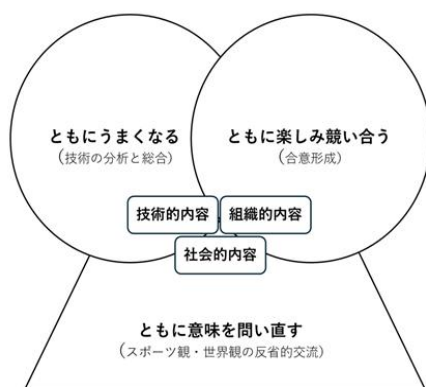


図1 体育における内容の領域構成

「体育の授業では『ともにうまくなる』〈第1領域〉に関わる技術的内容と『ともに楽しみ競い合う』〈第2領域〉に関わる組織的内容〈例えば、ルールづくり、組織的な企画・管理・運営〉の学びが、技術の分析―総合と子ども同士の合意形成を主軸とする異質協同のグループ学習活動として展開される。こうした学習プロセスでは、子どもたちも教師も授業の中で生起する活動や事象の意味を常に問い直しているはずである。言い換えれば、主として第1領域と第2領域の課題追究をする学習活動の中で、『ともに意味を問い直す』という価値形成に関わる実践課題が浮き彫りになってくる。教師はこの課題を的確に捉え、意図的に組織して第1領域と第2領域の課題追究に組み込んでいく必要がある。『ともに意味を問い直す』という価値形成に深く関わる課題は、第1・第2領域の実践課題を支え方向づける実践課題として位置づけられよう。

同時に、教科内容との関係で言えば、『ともに意味を問い直す』実践課題は、あらゆる発達段階において3つの内容領域（技術的内容、組織的内容、社会的内容）のすべてに組み込まれながら子どもの価値形成や確信、習慣、行動様式等の発達に関与することになる。」

体育の授業場面では、技術の習得やルールの合意形成過程で、互いの経験・価値観の相違や子ども同士の意見の食い違いが見られるが、丸山（2015）は、これらの食い違いを「ともに意味を問い直す」過程として意味づけることの必要性を指摘している。守能（2007）はスポーツのルールについて「何が面白くて何が面白くないかについての、まさに主観的な判断を中身とする合意的な宣言」と述べ、「そのルールの宣言内容は当然、彼らの手で変えられてよい」と示している。競争のルールを考えるために、子どもたちが競争に求める面白さの中身やそう思考するにいたる価値意識について問うような実践が求められる。

## 2 授業の構想

### （1）単元名「わたしたちのリレーのルールをつくろう」

—第5学年 陸上運動「リレー」—

### （2）リレーのルールに関する歴史的変遷について

世界的には「4×100m リレー」と「4×400m リレー」が主流であり、オリンピックをはじめ主だった大会はすべてこの2種目で行われている。ただ一方で、世界の大小様々な競技会では、多様なリレーが行われている。日本でも実業団と学生の対抗戦や都道府県単位のリレー競技では、100+200+300+400m を走り継ぐ「スウェーデンリレー」をはじめ、多様な種目が現在でも行われている。

歴史的には、「4×100m」など一人一人の走距離がほぼ一定のリレーと、一人一人の走距離が異なるリレー（スウェーデンリレー等）が共存してきたことになる。前者は、「競技化」の過程で走距離を含むルールの合理化が図られており、それに伴ってゾーンの長さが厳密化され、助走（加速）区間としての「補助線」の設定に至った。

それに対して、後者は、スウェーデンリレーのように単位時間の価値が全く違う種目を組み合わせて走る「非合理性」を許容し、それもリレーの魅力の一つとして受け継いできたと言える。その背景には、単に勝敗や記録のみを追求するのではなく、多様な種目を通して競い合うこと、レース展開そのものを楽しむこと、一人一人の能力や志向に応じるという発想があることが考えられる。

### （3）単元計画について

#### 【単元計画（全16時間）】

第1次 上手なバトンパスをめざそう・・・・・・・・・・8時間

## 第2次 リレーのルールを考えよう・・・・・・・・・・6時間（本時2/6）

リレーにおける教科内容を丸山（2015）が示した三つの領域（「技術的内容」「組織的内容」「社会的内容」）に区分して下記のように整理した。

| 教科内容領域                | 第1次（第1～8時）<br>1～4時：4人リレー<br>5～8時：16人リレー（運動会）<br>「上手なバトンパスをめざそう」                                    | 第2次（第9～14時）<br>「リレーのルールを考えよう」                                                  |
|-----------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------|
| ともにうまくなる<br>（技術的内容）   | 〔技術的・戦術的内容〕<br>①次走者のスタートの目印（go-mark）の設定<br>②「go-mark」を利用したスタートのタイミングとその方法（走り方）<br>③バトンの受け渡し（パス）の方法 | 〔技術的・戦術的内容〕<br>①一人ひとりの走能力を考慮した走距離と走順の設定や責任距離の走り方、ペースコントロールなど<br>②移動方法の違いによる走り方 |
|                       | 〔認識的内容〕<br>①短距離走における一人ひとりのスピードの変化の仕方（加速局面やスピード維持局面の理解）<br>②リレーにおけるスピード維持                           | 〔認識的内容〕<br>①一人ひとりの走距離や走順の変化による順位や記録の変化<br>②移動方法の違いによる走り方の違い                    |
| ともに楽しみ競い合う<br>（組織的内容） | ①グループやペアの目標の設定・役割分担<br>②練習方法の計画                                                                    | ①グループの目標の設定・役割分担<br>②リレーのルールを考える                                               |
| ともに意味を問い直す<br>（社会的内容） | ①バトンパスの技術の意味<br>②走順の意味                                                                             | ①走り方や走距離、走順など戦術の意味<br>②リレーで競い合う中身とその意味                                         |

「合理的なバトンパス技術の習得」のみを目標とする学習は、子どもが教師の答えを「再生・適用」してゴールとなる「目標達成型」学習の様相を帯びることになる。しかし、このような学習を進めるだけでは、その先に新たな問いを生み出すような学習にはなりにくいと考えられる。

森（2014）は、単一の範型・目標の達成を競う競争「emulation」と、共に（con）探す（petere）という意味をもち、範型・目標 自体を人々が共に探求する「探求型競争」（competition）の概念的な区別の必要性を指摘している。後者に関して、「異質な他者と相互に追究する『卓越性』の目標・内容や条件を『共に探求する』営みという性質」を宿していると指摘している。これを踏まえるとルールを考えていく過程は子どもたちが「何を競い合うのか」を合意し、「ともに競争を創り出す」ことであると捉える。また、子どもたち自身でルールをつくることができるようにするためには、子どもたちがルールを考えるための経験と知識を得る必要もあると考える。そこで、既存のルールの変遷を踏まえながら、新しいルールを創案していく授業を構想した。

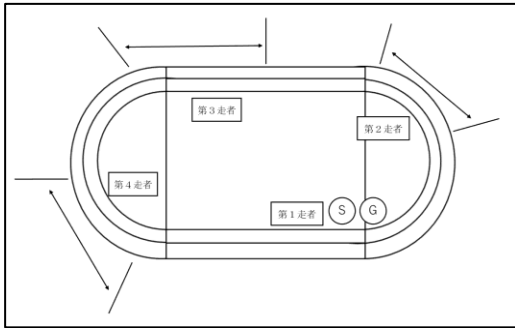
### 3 授業の実際

#### （1）本時までの学習

第1次では、まず合理的なバトンパス技術の習得を課題に掲げて学習を進めた。こ

の学習で採用したリレーは4人がバトンをつないでトラック1周走るリレーを採用し、セパレートレーンを走る方法である。また、本単位では本校の運動会種目の一つとして行われる5・6年生による合同種目のリレーの学習も含んでいる。運動会のリレーで採用したルールはオープンレーンによる16人リレーである。第1次のリレー学習では「4人リレー」と「16人リレー」の2つのルールを用いて学習した。

#### ① 4人リレー（体育の授業で実施：4時間）

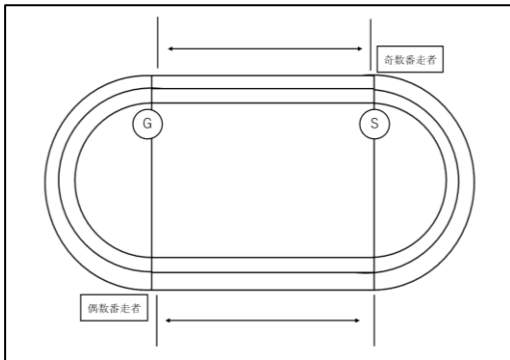


##### 【4人リレーの方法】

- ・S：スタート，G：ゴール，  
⇔：テークオーバーゾーン
- ・1周140mを4人でつなぐ。
- ・セパレートレーンを走る。

今日広く行われているリレーに関する科学的な知識や技術を子どもたちに獲得させるため、「合理的なバトンパス技術の習得」を目的とした授業に取り組んだ。主な教科内容は、「合理的なバトンパス技術」の習得に関する技術的内容（バトンの渡し方・受けとり方等）と、それに関わる科学的な認識内容（スピードを維持したままのバトンパスが有効）である。

#### ② 16人リレー（運動会種目の練習として実施：4時間）



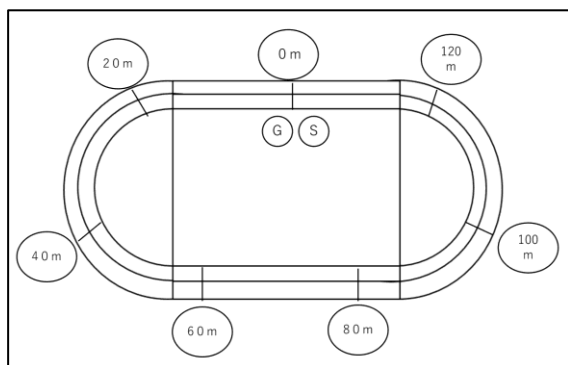
##### 【16人リレーのやり方】

- ・S：スタート，G：ゴール，  
⇔：テークオーバーゾーン
- ・1人半周を走り，16人でつなぐ。
- ・スタート時の接触を避けるために，第1走者はセパレートレーンを走り，第2走者の曲線からオープンレーンを走る。

運動会におけるリレーのルールは1チーム16人で，トラック半周ずつ走るルールである。自分の発走線と反対側（曲線レーンに入るところ）を通過した順に内側から並ぶコーナートップ制を採用した。「4人リレー」がセパレートレーンによるバトンパスを行うことで，他走者に邪魔されることなく，安定したバトンパスを行うことができたことに対し，「16人リレー」はオープンレーンを走るため，前走者の順位によって，バトンを受け取る場所が変動するという予測不能な状況でのリレーである。

## (2) 本時の展開

第2次は、経験した2つのリレーをもとに新しいリレーのルールについて検討することを学習課題として設定した。前時までの学習で子どもたちに「リレーの面白さやルールで大切にすることは何か」を問いかけた際に出てきた考えは「①バトンパスでつなぐ」「②競い合いができる」「③勝つか負けるかわからない勝負」「④平等・公正なルール」であった。この考えを踏まえて具体的にリレーのルールを考える視点を増やすために、本時では、「走る距離が異なるリレー」を子どもたちに提示した。



### 【走る距離が異なるリレーの方法】

- ・ 8人で1チーム。40m 2人、60m 2人、80m 2人、100m 2人の計560m（4周）を走りつなぐ。
- ・ オープンレーンで走る。混雑を防ぐため、2つ前の発走線（自分の発走線より40m手前）を通過した順に内側から並ぶコーナートップ制を採用。

「走る距離が異なるリレー」を用いることで、「4人リレー」と「16人リレー」で子どもたちが経験したバトンパスの方法や走るレーンの違いだけでなく、一人ひとりの「走る距離が異なるリレー」も経験することで、リレーで何を競うのかを考え、子どもたち自身がルールを考えられるようにしたいと考えた。

授業では、子どもたちに、スウェーデンリレー（4人が100+200+300+400mを走ってバトンをつなぐ）を行っている競技の様子を動画で見せた。動画を見た後に、このリレーに興味を持った子どもたちからは、次のような発言があった。

T：このリレーを見てどう思う？

C1：やってみたい。

T：やってみたいのはなぜ？

C2：いつもと違うリレーになりそう。

C3：誰が何番に走るかを考えられそう。

子どもたちは、スウェーデンリレーの様子を見て、自分たちがこれまでやってきた「4人リレー」と「16人リレー」には無かった「走順によって距離が異なり、人によって距離を変えることができること」で、これまでと異なる競争ができるのではないかと考えていた。このやり取りのあとで、実際に「走る距離が異なるリレー」を走ってみることにした。



実際に走ってみたあとの子どもたちの感想は次のような発言があった。

T : どうだった？

C5 : いつもだったら長さが同じだけど、長さが変わるのがおもしろい。

C6 : どんどん長さが変わるから、ぎりぎりの勝負ができるんじゃないかなと思った。

子どもたちは、今回試してみた「走る距離が異なるリレー」で「勝ったか負けたか」という結果ではなく、走ってみて、「互いに競い合いができる」ことや「ぎりぎりの勝負ができる」ことが実現できる競争だったかどうかという視点で振り返ることができていた。授業の最後に、子どもたちに今日のリレーを踏まえて、今後リレーのルールで試してみたいことを問いかけた。子どもたちからは、「今回と長さを変えてやってみたい。」「障害を置いてみたい。」という意見が出てきた。「今回と長さを変えてやってみたい」という意見は、走る人に合わせて、もっと適切な距離を見つけようという意見である。また、「障害を置いてみたい」という意見には、「障害を取り入れることで、単純な走力の差を埋めることができないか」という思いが込められている。これは、リレーのルールを考える際に大切にしたいと考えている「競い合いができる」「勝つか負けるかわからない勝負」を踏まえた意見だと考えられる。

#### 4 おわりに

体育でリレー教材を取り上げて学習する意味は、ルールや戦術、バトンパス技術などのリレーの形式、様式、技術・戦術に関わる内容を子どもたちに学ばせ、リレーがわかり、できるようになることである。しかし、子どもたちが学習していることはそれだけではないと考える。子どもたちは今回のリレーの学習を通して、競争の意味についても追究していると考ええる。次に紹介するのは、本時の学習が終わった後の子どもたちの感想である。

- ・ 走る距離が違うことで、長い距離がいい人と短い距離がいい人がいるので、僕は大切にしたい項目の一つのルールの平等が達成できているのではないかと思います。
- ・ 走る長さを変えるというルールは新しいルールでした。他にも自分たちが勝負を楽しむルールはないか考えたいです。

自分の能力に応じて選択することができるという、一人ひとりの走る距離が異なるルールは、これまで子どもたちの中に無かった視点であり、誰にとっても楽しめるルールを思案する際の思考の幅を広げることにつながったのではないかと考える。

#### 【文献】

- 1) 丸山真司 (2015)『体育のカリキュラム開発方法論』創文企画
- 2) 守能信次 (2007)『スポーツルールの論理』大修館書店
- 3) 制野俊弘 (2020)「リレーの発祥とルールの変遷過程に関する歴史的研究」『体育科教育学研究』
- 4) 森敏生 (2014)「スポーツにおける競争の文化的特質」『たのしい体育・スポーツ』